

オスマン朝手織物生産の研究手法を再考する

— イランの手織物産地研究のために

吉 田 雄 介

Rethinking research methodologies for Ottoman hand-weaving industries: towards the better understanding of Iranian handloom industries

YOSHIDA Yusuke

While the history of Iranian handicrafts is difficult to grasp, historical research and writing that focuses on the economic history of Ottoman handicrafts has flourished over the past several decades. So this essay is a critical review of the research methods applied to hand-weaving industries in the economic history of the Ottoman for the purpose of exploring the possibilities of research into the Iranian handloom industries, since Ottoman craft productions resemble their counterparts in Iran. Analysis focuses especially on the works of Suraiya Faroqhi and Donald Quataert. In conclusion, we identify the following points and assume that they are instructive in regard to Iran. (1) Changes in specific industries should not be generalized to other industries and regions, because trends in the development and decline of crafts production were varied. (2) Such changes were determined by changes in local, national, and international politics and economics; trends in consumer markets, and ethnic issues etc. (3) Rural productions were not just for self-sufficient use, but for the market, and thus it is necessary to understand the producing areas in the local, regional, national, and international context. (4) The so-called “decline paradigm” has a strong impact on not only modern craft production studies but also our contemporary perspectives.

キーワード：手工業 (Handicrafts)、手織物 (Hand-weaving)、世界システム (World-System)、イラン (Iran)

1 問題の所在

イランの手工業・産地に関する日本人の研究は、ペルシア絨毯を除けば多いとは言いがたい。一方、トルコやインドを対象地域とする研究では、手工業を対象とするフィールドワーク研究が増えてきた（たとえば、上羽、2006；金谷、2007；田村、2013）。ただし、社会学や民族学では当然のこと、筆者の専門とする地理学でもフィールドワークを主とする場合には、その関心がどこにあるかといえば現在および近い過去（the recent past）にある。

産地の今現在は、過去の積み重ねの上にある。そして、「過去」の産地の姿は必ずしも静態的ではなく動的に変化し続けたに違いない。イランが経験した政治や社会の変動の歴史を知っていればなおさらのことである。ところが、ほんの少し時代を遡るだけで、聞き取りその他から情報を得ることは難しくなり、過去の姿はわからなくなる。この部分にアプローチする方法を工夫しなくてはならない。扱うべき最大の問題はこの点にあるが、さらに問題を複雑にするのは、手工業や過去に向けられる「まなざし」の問題である。たとえば、本稿で扱う Quataert の問題とする「衰退パラダイム（decline paradigm）」の強固さである。

本稿はイランの産地研究の可能性を探るための準備作業である。ここでは、先に触れたような問題を考えるための第一歩として、まず隣接のオスマン朝経済史の分野における手織物生産の研究手法の整理をおこなう。近年オスマン朝を対象とする社会経済史研究の進展はめざましく、手織物生産に関してもそれなりの数の研究があり、しかも欧米その他の新しい手法も大胆に取り入れており、イランの事例に対してヒントが得られるのではないかと考えた。

本来であれば、インドの手織物生産に関しても同時に扱うべきであるが、文献が多いためここでは断念した（次稿以降でトルコ、インド、イランの比較を行いたいと考える）。具体的には、オスマン社会経済史の主要な論者が英語で発表した研究を中心に、その関心と依拠する資料について検討する。

なお、筆者は歴史学を専門とする者でもなく、ましてやトルコ史やオスマン史については門外漢である。あくまで、本稿はイランにおける産地研究のための作業であるということを断っておく。本来であれば、オスマン朝経済史に関するレビュー論文を利用すれば済むことであるが、オスマン朝経済史の研究動向を整理・紹介する日本人研究者のそれは残念ながら若干古い。もちろん、ここでも林（1991）や江川（1999）、三沢（1999）ら先学の研究は参考にさせてもらった。なお、豊富な一次史料を使用したオスマン朝社会経済史研究は日本でも盛んであり、永田（1976；1997）、江川（1998）、松井（1999）、五十嵐（2002）、Yamaguchi（2003）、藤木（2004；2005）、鈴木（2012）、澤井（2015）などの研究を参照されたい。

2 オスマン朝経済史研究に見られる近年の動向

(1) 背景となる両地域（オスマントルコとイラン）の異同

まず、ここで対象とする時代、つまり近代期とその直前の両国の置かれた状況について整理しておく。

近世から近代にかけて、西アジアおよびその周辺には、オスマン朝（1299-1922）とサファヴィー朝イラン（1501-1722）、そしてムガル朝（1526-1858）という巨大な3つの帝国が並び立ったが、これらは今では「火薬帝国（Islamic Gunpowder Empires）」と呼称されることが多い。すなわち、火薬時代に統一された大帝國であり、サファヴィー朝のギジルバシ連合のみならず各王朝を打ち建てた主体が中央アジア出自のチュルク系遊牧民イスラーム教徒という共通点もある（火薬帝国については、Streusand, 2011を参照のこと）。この共通性が本稿でイランの隣国のトルコの事例を検討する理由である。

この3つの帝国が成立した時期は、ちょうどヨーロッパにおける世界システムの萌芽期であるが、それぞれヨーロッパ資本主義との関係は異なる。順序は逆になるが、近年の中東経済史の動向を理解するには、世界システム論の理解は欠くことができないので、先に世界システム論から3つの帝国の位置の違いを確認しておきたい。

ウォーラステインの提唱する世界システム論とは、今では広く知られているように、過去500年をかけてヨーロッパを中心とする資本主義システムが地球全体をシステムに組み込んだ長期のグローバル化のことである。世界システムの3つの基本的要素は、まず単一の世界市場であり、ここで私企業が競争し、効率的な生産者が非効率的なライバルを市場から放逐する。第二の要素は、多元的な国家システムであり、このシステムには多数の国民国家が併存する（逆に、システムが政治的に統一された状態が、ウォーラステインのいう「ミニシステム」を統合した「世界帝国」）。第三の要素は、システム内の3つの階層的な地域である。すなわち、高い生産性の経済と政治的な競争力を有する「中核（core）」地域、逆に非効率的な経済と政治的に競争力が弱い「周辺（periphery）」地域、そしてその中間の「半周辺（semi-periphery）」地域の3つであり、搾取プロセスはこの3層の階層構造を通じて作動する。

この単純な図式を使えば、資本主義的な「発展」と「低開発＝発展途上」を同時に分析することが可能になる。つまり、世界経済の地理的な違いとして、両者を同時に分析することが可能になる。資本主義的でないから遅れているわけではなく、資本主義システムに組み込まれた

がゆえに中核（西欧）に資本を取奪され貧しい状態に置かれることになる¹⁾。

さらに、オスマン朝経済史家のPamuk (1987) は、この「周辺」の形態について、Gallagher and Robinson が提唱した公式帝国 (formal empire) と非公式帝国 (informal empire) という区分に加えて、第3のカテゴリー、すなわち「帝国主義の競合下で世界資本主義が浸透する地域」を想定する。公式帝国の代表がインド、非公式帝国のそれが南米、そして第三のカテゴリーが中国やオスマン朝やペルシアに該当する (pp.4-7)。第三のカテゴリーは、比較的強力な国家が存在したため、前者に比べて世界資本主義の浸透のスピードは遅かった。

オスマン朝とイランをこの第三のカテゴリーに分類できるとしても、オスマン朝とイランは異なる。世界システムへの組込・包摂を不平等な貿易関係の強まりとするならば、その包摂はオスマン朝が早く、イランは世界システムの「外部世界」に長くとどまった。オスマン朝は、16世紀までは外へと拡大を続ける史上最大級の世界帝国であったものの、18世紀には、近代ヨーロッパ世界システムに組み込まれる。すなわち、資本主義世界経済の分業体制に連結され、さらに多元的国家システムに統合された。こうして、巨大な世界帝国であったオスマン朝もシステムを構成する他の国家と変わらない普通の国家になった (Kasaba, 1988)。また、18世紀末までにはフランス製品もオスマン朝市場に深く食い込み、フランス人領事館も各地に設置された (Göçek, 1987)。

一方、Foran (1989, p.91) は、17世紀のイランを世界システムの外部世界における世界帝国に分類している。当然、この組込・包摂の速度の差が、イギリスやマルセイユの史料を使って、交易や経済の詳細な分析が可能なトルコとそれが困難なイランの差につながる²⁾。

(2) オスマン朝経済史研究の近年の動向

オスマン朝経済史研究は、古くからアナール学派を含めヨーロッパの新しい歴史研究の影響を強く受けてきた³⁾。また、1978年に出版されたサイードの『オリエンタリズム』が主導した植民地主義や帝国主義を鋭く批判するポストコロニアル批評の影響を強く受けている。そして、1980年代に入ると、この種の流れでオスマン朝経済を論ずることが主流となる。その研究動向

1) 地理学の世界システム論の理解に関しては、テイラー (1991) を参照されたい。

2) なお、ウォーラステインの「世界システム論」の影響を受けたオスマン朝の「衰退」史観が、サファヴィー朝の「衰退」史観にも影響を与えており、経済的な理由ばかりを強調するそうした見方を見直す必要があるのではないかという主張が最近では強い (例えば、Newman, 2006)。やはり、隣り合う巨大な帝国であってもオスマンとイランの組み込みの差に関しては注意が必要である。

3) ブローデルらがオスマン史の人口動態や価格革命に与えた影響については、İnalçık (1978) を参照されたい。なお、*Review* 誌のこの号では、アナール学派が社会科学に与えたインパクトを特集している。

を端的に表しているのが İslamoğlu-İnan (1987) であろう。この論文集は、Faroqhi や Pamuk、Quataert らが発表した論文を再録したものである。

編著者である İslamoğlu-İnan は、この論文集の導入論文 (1987) において、「本書に収録された諸論文は、オスマン朝史の書き直しの試みの一部である (p.2)」として、世界システム論に由来する新しい研究動向であることを強調している。彼女は、オスマン朝史に向けられた学問的なまなごしについて整理するが、まず西洋の封建制と対比した東洋の専制国家である「アジア的生産様式」という19世紀のオリエンタリストの見方を指摘する。そしてこのオスマン朝の捉え方は、第二次大戦後には開発主義 (近代主義) 的な見方に引き継がれたとする。「要するに、オスマン (「イスラーム」) 社会についてのアジア的生産様式や19世紀のオリエンタリスト、近代主義者の概念のもつ根本的な間違いは、それらが無歴史的=超歴史的 (ahistorical) であるということに (p.7)」あり、こうした停滞した静態的で無歴史的なオスマン朝理解を変革するために、世界システム論を踏まえようというわけである。同様の指摘は、Faroqhi (1999) もオスマン朝史の歴史記述 (historiography) を論じる中でおこなっている (introduction および第7章を参照)。

なお、翌年には先に触れた Kasaba (1988) の著作も出版され、オスマン史の世界システム論からの見直しは1980年代には普及する⁴⁾。また、ウォーラーズテインがセンター長を務めた「フェルナン・ブローデル・センター (Fernand Braudel Center for the Study of Economies, Historical Systems, and Civilizations)」の発行する *Review* 誌上にもオスマン朝関連の研究が頻繁に掲載されている。たとえば、1988年には Keyder が special editor を担当した「オスマン帝国：19世紀の変容 (Ottoman Empire: Nineteenth-Century Transformation)」特集が生まれ、Pamuk (1988) や Quataert (1988) などが執筆している。

経済史の分野では、Mendels (1969) が提唱したプロト工業化論との関係にも言及しておかなければならない。「プロト工業化 (proto-industrialization)」とは本来的には16~19世紀にヨーロッパ各地において生じた非局地的市場 (non-local markets) 向けの商品生産をおこなう農村家内制工業の拡大を示す用語である。このモデルはシンプルなため短期間の内に東アジアや西アフリカ、オスマン朝といった非西欧地域に導入された (ヨーロッパのプロト工業化に関しては、Ogilvie, 1993を参照のこと)。その普及は1982年にブダペストで開催された第8回国際経済史学会議のプロト工業化部会に示される。この部会には世界各地からプロト工業化に関する研

4) なお、ブローデルやウォーラーズテインの考え方がアーヤーン (地方名士) 研究に与えた影響については、永田 (1997) を参照されたい。

究論文が提出されたが、オスマン朝のバルカン半島地域を事例とする Palairt (1982) の研究もその一つである。Quataert (1993) は、オスマン朝の製造業の歴史記述を分析して、それが近代的な機械制工場生産のみを想定してきたことを指摘した上で、1970年代以降のヨーロッパ経済史研究における Mendels ら「歴史家によるヨーロッパでの相当な規模でおこなわれた農村および工場形式でない (non-factory) 製造業の発見が、19世紀中東の製造業を検討する本書のひらめきを与えた (p.161)」と語っている。

それではこのような影響を受け、1980年代以降、社会経済史の分野でなぜ織物生産に研究の関心が向けられるようになったのだろうか。次章において、Faroghi と Quataert の研究の足跡を検討する。この2人に特に注目するのは、オスマン朝の手工業生産にこだわり比較的長期にわたり研究を発表してきた研究者は他にいないからである。

3 オスマントルコの経済史研究における手織物への注目

(1) Suraiya Faroghi の諸研究

オスマン朝経済史の分野では、手織物生産に関する研究は特定の産地およびギルドの生産に集中してきた。とくに、首都に次ぐオスマン朝第二の都市であり、生糸・絹織物の大産地であるブルサの絹織物に関する研究が多い。ここで扱う Faroghi や Quataert も一連の研究のなかでこの産地に必ず言及している。たとえば、Faroghi (2013) は、古くからブルサの織物生産は盛衰を経験したが、国際的なブルサの絹織物生産は国内市場向けに転じることで生き残りをはかり、さらに衰退するとヨーロッパへの生糸輸出に転じ、最終的に世界システムに組み込まれるという産地の歴史を概説している (第7章, pp.99-116)。こうした一部の産地を除けば遅れていたアナトリア地域の織物生産の研究を進めたのが Faroghi である。

彼女は、1970年代に入り、学術雑誌にオスマン朝の社会経済史に関する論考を発表するようになる⁵⁾。彼女の織物産地に関する初期の論考は、1979年に発表された論文と1980年に発表され、先に触れた İslamoğlu-İnan (1987) の論文集にも再録されたものがある。さらに、1984年の彼女の単著においてもアナトリアの織物生産の分析が重要な部分を占めている (第5章)。以下に、順にその関心と方法を確認する。

Faroghi (1979a) の「16・17世紀の中央アナトリアの綿花および綿布生産についての覚書」では、前工業経済における織物生産の重要性に鑑みれば、都市と農村の関係や交易・貿易システ

5) Faroghi の膨大な著作・論文のリストは、Costantin and Koller (2008, pp.479-488) にまとめられているので参照されたい。

ムを分析するには、綿織物生産を考慮しなければならないとしている。具体的には、総理府オスマン文書館やアンカラの文書館が所蔵する徴税資料を中心に、綿花については課税史料 (*tahrir*) を、綿布に関しては売上税ないし染織作業所の徴税請負人の記録からデータを得ている。そうしたデータに基づいて、1570年代のアナトリアの綿花生産量を推計している。なお、織物生産量に関するデータについてはいくつか問題がある。たとえば、印紙税 (stamp tax) が織物と他の品目が合計されている場合もあり、使用できない年度も多い。また、印紙税は販売額に相当するため、地元で生産された製品なのか移入された製品なのかの判別が不可能という問題がある。そうした欠点を踏まえた上で、綿布 (*boğasi*) に課税された各産地の印紙税額を表にまとめている。さらに、生産だけでなく、原料である綿花の生産者への供給や生産者から市場への供給について商人の活動を検討している。結論として、第一に粗綿布生産はアナトリア各地で広く行われ、第二にそれは市場と密接な関係を有したということを挙げている。

一方 Faroqhi (1986) は、1976から1984年のあいだに発表された Faroqhi の論考の一部を一冊に採録した論文集である⁶⁾。この論文集には1980年に発表された「ルメリとアラブ地域の織物生産：地理的分布と国内交易 (1560-1650年)」が収められており、今度はバルカン半島南部やアラブ地域の織物生産を論じている。地域は異なるが、先のアナトリアの研究と同様に織物の生産と消費が地域内で完結したという従来の静態的な考え方への疑問からこの主題を選んでい。そして、これまで研究がほとんどなかった綿織物、麻 (hemp and linen) 織物についても都市のみならず農村部でも生産されていたことに注目し、この種の織物でも長距離の交易がおこなわれ、「これら手工業は、都市と地方の両事例において強い市場志向を持ちつつ実施された (p.171)」と主張する。そしてこの研究でも、ルメリすなわちバルカン半島南部から地中海沿岸のアラブ地域の織物産地の分布図が分析結果として示されている。

Faroqhi (1986) には、この論文以外にも、織物生産と間接的に関連する研究や農村生活に関する研究が収められている。「1560～1830年頃のオスマン帝国の明礬生産と明礬交易」(Faroqhi, 1979b) もそうである。明礬鉱山の運営は一般的に徴税請負人によりおこなわれたため、史料が豊富であるという利点がある。明礬はヨーロッパ向けの輸出のみならず、オスマン国内向けにも重要であり、織物や皮革産業との関係が深かった。そして、明礬研究から手工業生産を解明する可能性を指摘しているが、ここでは指摘にとどまり、実際に染色などの分析は行っていない。

また、「16世紀末のサイデリ地区の農民」(Faroqhi, 1983) では、2,200人強の納税義務者がい

6) 織物生産への言及は少ないものの、この著作を中心に Faroqhi については、三沢 (1988) が論じているので参照されたい。

た中央アナトリアのコニヤの北に位置する Saideli 地区における16世紀末の農民の生活状況を検討している。総理府オスマン文書館の枢機勅令簿の課税史料にはこの地区の全納税義務者の名前や居住場所がわかる史料があり、コニヤの法廷台帳 (*kadi registers*) には農民の財産目録が保管されている (うち38が男性、12が女性に属するもの)。こうした史料を基に人口や農地や作物、家畜、あるいは住まいや家財道具について分析している。ただし、織物生産に関する検討はなされていない。これは史料の性格上仕方ないことであろう。Faroghi (2006a) では、織物産地研究に利用できる一次資料について論じているが、「オスマン官僚制は、手工業事情に関して限定された文書しか私たちに残していない (p.337)」という。やはり、公文書館に保存された史料では、産地全体の動向を把握することはできても、個々の生産者の姿を把握することはできない。

Faroghi (1984) の『オスマン朝アナトリアの都市と都市住民：都市部における交易、手工業および食料生産』は、このタイトルが示すように16、17世紀のアナトリア地域の都市に関する総合的な研究である。本書が対象とした時期はアナトリア地域の人口が増加した時期であり、都市の人口増加に織物産業を含む諸産業 (皮革産業と金属工業) や農業がどのような影響を及ぼしたのかを検討している。こうした産業が分析対象として選ばれた理由は、各都市のワクフ寄進された店舗数から重要な産業とみなすことができるからである。

織物生産については、第5章「織物製造：地理的分布と歴史的発展 (Textile Manufacture: Geographical Distribution and Historical Development)」で詳しく検討をおこなう。依拠する史料は、やはりイスタンブールやアンカラなどの文書館に所蔵される徴税関係の史料である。具体的には、綿花供給、麻類、綿布生産、敷物を含む羊毛製品、ヤギ毛およびヤギ毛製品、絹織物を個別に扱う。さらに、染色に利用される明礬と染物屋を織物生産の代理変数として扱っている。

これまでの研究と同様、アナトリアの織物産地の分布地図 (p.134) が示されており、綿花栽培および絹織物産地はアナトリアの地中海沿岸およびアナトリア南西部に、毛織物産地はアナトリア西部に、麻 (hemp) 織物産地が黒海沿岸部に、モヘア織物産地がアンカラ周辺に点在したのみならず、ヤギ毛織物産地や絹織物産地、亜麻 (linen) 織物産地もアナトリアの各地に存在していたことがわかる。この地図上にはアナトリアの最東部の産地は描かれていないが、染物屋の課税額を示した別の地図 (p.152) には、ハルプト (Harput) やマラトヤ (Malatya) のようなアナトリア東部の都市についても相当な課税額があったことが記されている。

Faroghi は、1960、70年代の歴史家が、特定の織物産地の産業の成長と衰退をオスマン朝全体の手工業活動を映し出す鏡であると考えた点を批判している (2006b, p.356)。その点で、彼女

の一連の研究からは、各地で多様な織物生産がおこなわれ、しかも都市部のみならず周辺農村部でも市場向けの織物生産が盛んにおこなわれていたことが明らかになった。しかし、利用できる史料の性質上、大雑把な把握にとどまるのも事実である。

なお、先の Faroqhi (1980) は、オスマン朝の織物生産の見取り図を作成するには3種類の史料が利用できるとして、各史料の長所と欠点を紹介している。この点は重要なので確認しておこう。(1)印紙税 (stamp tax) および売上税 (*damga*)。ただし、本論文の対象時期に関してはこの種の課税史料が乏しいと断っている。(2)染物屋に関する課税記録。ただし、染物屋に関する課税記録からは、合計額は判明しても、それぞれの場所に何ヵ所の染物屋があったのか、染織される織物が販売用なのかまではわからないという問題がある。(3)枢機勅令簿 (*mühimme defterleri*)。残念ながら、織物生産に対する中央政府の関心が強くなかったため、情報が少なく、利用は限られるという。そして、「オスマン朝の織物生産の厳密な研究は、これら3つのアプローチのすべておよびその他のアプローチを用いることになる(Faroqhi, 1980, p.64)」と述べてはいるが、この研究 (Faroqhi, 1980) では枢機勅令簿に記録された勅答書 (rescripts) の利用に限定するとしている⁷⁾。

(2) Donald Quataert の諸研究と「衰退パラダイム」

Quataert の研究が対象とする時期は、Faroqhi のそれよりも遅く、ヨーロッパの産業革命期に当たる時期である。

1980年代にも Quataert は、近代期のブルサの絹工業 (1983) やアナトリアの絨毯生産 (1986) などの織物生産、織物産地関係の研究を発表していた。たとえば、Quataert (1986) では、オスマン朝経済に生じた変化が単なる衰退と間接的なヨーロッパによる搾取の歴史ではないことを示している点は共通認識になったとしながらも、労働者のジェンダー差やエスニック・アイデンティティ、労働条件などには研究者が目を向けていないことを不満とし、19世紀のオスマン労働史の第一歩となる研究として、ウシャクの絨毯並びに関連産業を対象とした。他にも、*Review* 誌に掲載された Quataert (1988) の短い論文では、19世紀の経済構造を知りうる情報源

7) カーディー文書に残された政府の命令は、政府の見解を反映し、そのせいで人々は「客体」として扱われているが、遺産目録では人は「主体」として立ち現れると評価されている (Koller, 2008, p.2)。ただし、手織物生産に関しては後者の史料からも見えないようである。また時期は異なるが、19世紀中葉のバルケスイルのアバ (毛織物) 産業を『資産台帳』から分析した江川 (1998) も、「『資産台帳』には例えばアバの反物数あるいは毛糸の重量といった生産量や、それらの売り上げによる収入かどうかに関する情報は一切記載されていない (16頁)」とする。また、アバの仕上げ機は資産台帳に記載されている例もあるが、生産手段である織機については記載がないようである。

の少なさとバイアスについて概説した後で、「オスマン朝の製造業とその運命」に関する4つの問いを提起し、この分野は再検討の必要があることを指摘している。

さらに進んでQuataert (1991) では、「世帯と女性の仕事への注目が、19世紀のオスマン朝製造業の歴史を正確に理解する上での鍵になる。ヨーロッパの産業革命期にオスマン朝の製造業が「衰退した」と広く識められている。しかし、衰退は何を意味するのか？ひょっとすると1800年から1900年の間にオスマン朝の工業の総産出高に減少はなかったのかもしれない (p.256)」とまで挑発的に主張する。また、「オスマン朝の地方 (rural) (および都市) 生活において日常的に営まれたこの製造業は、オスマン朝の製造業研究と農業研究の両方でほぼ完全に無視されてきた。製造業を研究する学者は、都市の男性のギルドに注目する一方で、地方を対象とする研究者は通例、作物栽培や家畜の飼育のみを考察してきた。地方の世帯は農業生産をしていただけではない (pp.256-257)」と従来の研究の不備を主張する。

こうした見直しを具体的に実践したのがQuataert (1993) の単著、『産業革命期のオスマン朝の製造業』である。19世紀から20世紀にかけてのオスマン朝における手織物生産について、第1章で織物の原料となる綿花、染料および綿糸生産について分析し、第2と3章で各地の織物産地の動向を分析した後で、重要な輸出品であった絹布と生糸生産を第4章で、絨毯生産を第5章で丹念に検討している。その際に根拠としたのが、領事報告を含む主としてヨーロッパの公的な史料であり、そこから各産地の織機台数や生産量を収集している。当時のヨーロッパ諸国にとって、オスマン朝地域は、重要な製品の市場であるばかりか、欠くことのできない原料供給地でもあり、詳細なデータを収集しているからこそ可能となった研究である。

本書の目的は、「オスマン朝の織物製造業は、価格の下落、技術や流行の変化、そして激しい外国との競争にもかかわらず、19世紀を通じて強い活力を維持した (p.23)」と述べるように、従来の根強い「工業衰退 (de-industrialization)」という見方への反論である。実際の手法としては、具体的な各地の織機台数や生産量を挙げつつ、反論してみせる。順に、(1) ヨーロッパ諸州、(2) イスタンブール、(3) イズミル地方、(4) ブルサ、(5) コニヤ、(6) アンカラ、(7) アマスヤ、(8) トカト、(9) ギュルン、(10) トラブゾン、(11) リゼ、(12) ビトリス、(13) ヴァン、(14) ハルプト地方、(15) ディヤールバクル、(16) モスル、(17) アレッポおよび北シリアである。このようにバルカン半島南部からアナトリア西部、アナトリア東部を経て、北シリアまでの主要な産地を一通り、丹念に検討している。当然、イスタンブールやブルサあるいはアレッポなどの大産地については情報量が多いため扱いも大きくなる。また、生産形態に関しては、トラブゾン、ディヤールバクル、アレッポのそれが詳しい。こうした検討から明らかになることは、まず、綿や絹、モヘア、毛など織物の種類によりヨーロッパの製品から受けた影響や産地の経た経験の差が異なる。

さらに、地域的な差も大きい。したがって、いずれの産地も内的に大きく変化しており、変化への対応方法も異なる。たとえば、輸入綿糸の使用やオスマン領内の紡績糸の使用、あるいは高価格帯の製品から安価な価格帯への製品の転換、絹布から絹綿交織への転換などである。

アレppoもオスマン朝の工業衰退の格好の事例とされてきたが、表「アレppoおよび周辺の織機台数、1800-1914 (p.76)」に掲げられる数値を追えば、衰退とみなすよりも中央政府との関係（たとえば、徴税請負人の起こした反乱）や主要な市場であるエジプト市場の政治状況による左右、綿花・綿糸の国際価格の変動、アルメニア人虐殺など、絶えず変化する状況に応じて、生産量が激しく変動していることがわかる。そして、20世紀に入り、生産量は増加している。また、ブルサなどでも有名な絹産業の陰に隠れて言及が少ないが、綿布生産が19世紀末から拡大した (pp.59-60)。そのブルサの絹織物でさえも、1850年代から1880年代にかけて蚕の微粒病の流行で生産者が激減した後、1890年代以降は増加に転じている。また、19世紀半ばまでにヨーロッパ向けの綿布、モヘア織物、毛織物の輸出市場をほぼすべて失ったのは事実であるが、代わりに輸出用のレース製造や絨毯製造が爆発的に拡大したのもまた事実である。

最後の「結び」の章で、「オスマン朝の織物製造は19世紀に明らかに変化した。しかし、それは衰退なのか？オスマン朝経済の工業衰退だったのか？ (pp.161-162)」と再び問う。ヨーロッパと比較した産出高、技術水準、国民所得への貢献度の点からは、オスマン朝工業は確かに衰退したことになる。また、先に述べたように一部の有名織物の輸出市場が失われ、手紡工も仕事を失った。これら諸点についてはQuataert自身も認めるものの、彼はそれでも生産性の上昇は生じたとする。すなわち、手紡糸の代わりに、①輸入綿糸が使用され、②さらにオスマン帝国領内の紡績工場が生産した綿糸を利用し、さらに③機械織りの綿布工場の活動が始まったことで、生産性の上昇が生じ、一人当たりの工業衰退は生じなかったという (p.165)。

そして、「衰退パラダイムを超えて (Beyond the decline paradigm)」という節で本書を締めくくっている。Quataertはオスマン朝側の史料が乏しい中で、領事報告などヨーロッパ側の情報源に頼った点は問題があると自身で認めている。しかし、西欧化された官僚や知識人という19世紀のエリート世界に焦点を当てる歴史記述の伝統からは逸脱した研究であり、こうした伝統がオスマン朝の製造業を不可視にしていたとも主張する (pp.167-169)。

確かに、利用可能な情報が十分ではなく論証があいまいな部分もないではないが、それでも彼の研究は19世紀のオスマン朝の手織物産業の持つ強い生命力と変化への適応能力を十分に明らかにできたと評価できよう。ただ不満なのは、本書の最後の数頁になって19世紀末のオスマン朝の手工業の復活が、低賃金で労働集約的なものであり、女性や児童労働も大量に動員したことを強調する点にある。さらに、実質賃金が一貫して低下したことについても末尾で触れる

にとどまる (pp.176-177)。織物生産のダイナミズムを強調するためか、こうした負の側面への言及は少ないように思う。

なお、Quataert は İnalçık and Quataert (1994) の「Manufacturing」の項目を執筆しているが、ここでは、オスマン朝の製造業を3つに時期区分している。すなわち、①1800-26年の期間はオスマン製品の輸出が減少し続けた時期であり、②1826-70年は、特に織物産業における最大の衰退の時期であり、③1870-1914年が新しい工業が生まれた時期、である。

(3) 1990年代後半から2000年代の動向

オスマン朝の経済的「衰退」については、ヨーロッパの近代工業製品にオスマンの手工業製品が浸食されるという図式で捉えられてきた。実は、のちに Quataert や Faroqhi は、こうした図式を問題視し、オスマン史および手織物史のアプローチについて整理している。ここでは、それらを検討することで、織物生産研究の見直しを検討する。そこで、1990年代後半以降の研究を中心に議論することになるが、著者の思索の変遷をたどることや、従来の研究に対する批判を検討することが必要な場合には、それ以前の研究についても適宜触れたいと思う。

当然のことながら、Faroqhi と Quataert では対象とする時期も論調も異なるが、共通する部分もある。たとえば、Faroqhi (2006b) は、「織物生産の衰退とリバイバル (Declines and revivals in textile production)」というタイトルが示すように、織物生産の衰退と復活について論じる。そして、Quataert よりもずっと古い時代を対象とするのであるが、「過去25年の調査が示すように、オスマン朝の織物生産が16世紀末以降あらゆるダイナミズムを失ったという古い前提はもはや道理がない (p.374)」と述べている。また Faroqhi (1991) では、手工業が状況の変化に対応しつつ19世紀末にも生き残ったとする Quataert の主張を引用した上で、19世紀と同様、16世紀にもオスマン朝の手工業が衰退し原料輸出が伸びたものの、その後の大都市の危機とヨーロッパの経済的矛先が南アジアとアメリカ大陸に向かったせいで、18世紀に復活したとしている。手工業の衰退と勃興の歴史は単線的ではないという Quataert の主張を Faroqhi も異なる時代で論証したのである。

さらに、Faroqhi は手織物生産の衰退のみならず、「衰退パラダイム」一般についても検討している。たとえば、Faroqhi に捧げられた著作において、Koller (2008) は、Faroqhi が「衰退のパラダイム (paradigm of decline)」や「勃興と没落パターン (rise and fall pattern)」に代わるオスマン朝史の記述のための新しい枠組みとして、「創始の段階 (stage of foundation)」(1453年まで)、それに続く「拡大 (expansion)」(1453-1575)、「危機と安定 (crisis and stabilization)」(1575-1768)、「新しい危機 (new crisis)」(1768-1830年頃) および「収縮 (contraction)」(1830

-1918) にオスマン朝の歴史を区分したと評価している (p.1)。つまり、一面的な衰退や沈滞とみなさないように細かな時期区分を提案したのである。

それでは、FaroqhiはQuataertの視点をどのように評価しているのだろうか。先に触れた部分では好意的であったが、後のFaroqhi(1999)では、Quataertの研究(1993)について、彼が主張するような手工業の存続や復活はあったが、「これら製造業はたいてい、低賃金労働の搾取を通じてのみ存続することができた…ヨーロッパが拡張する時期のオスマン朝の製造業に対するQuataertのイメージはいくぶん修正主義者(revisionist in approach)である…(p.196)」と、やや否定的な捉え方をしている。やはり手工業の女性化の評価が問題になる。

次に、Quataertの考え方の変遷をたどることにしよう。Quataert(2000)は学部学生用の教科書である。本の性格から手織物産業に関する言及は少ないが、「オスマン製造業のグローバルな地位は低下した。つまり、その国際市場の大部分は失われ、生産はいまだ巨大かつ競争力のある国内市場に向けられた。そして、国際輸出向けの特定の製造業部門は生産を拡大した(p.132)」と以前からの論調を踏襲している。

Quataert(2003)では、工業衰退にとどまらず、「衰退パラダイム」にまで考察の範囲を広げ、「衰退パラダイム」は誤りであると喝破する。この場合の衰退パラダイムとは、「オスマン朝の衰退が16世紀末から始まり、オスマン帝国が最終的に消滅した1922年まで続いた(p.1)」という見方である。「パラダイム」であるから一度受容されると、明快な事実となり、反論や別の見方が困難になる。すでに16世紀末のオスマン朝のエリートたちも古き良き時代を懐かしんでいたように、こうしたパラダイムの根は深い。

しかし、1980年代以降は研究者も当時のオスマン人の記述の客観性に疑問を向けるようになっていく。彼の分析では、そもそも衰退パラダイムに対する批判が生まれたのは、1970年代に世界システム論が広げたように、オスマン朝史の歴史記述がグローバルで比較史的になったからである。そして、オスマン朝政府およびその社会・経済も衰退と理解したり西洋化の模倣の失敗と理解するよりもむしろ、不断の変化の過程にあったと理解するように変化してきた。こうしたオスマン朝政治史における衰退論の見直しは、彼の専門とするオスマン朝経済史の分野でもパラレルに生まれた。そして、Quataert(2003)では、19世紀末にとどまらず、「オスマン朝の手工業は1750年以降、生き残ったのみならず、ひょっとしたら拡大さえした…(p.6)」と改めて主張している。

それでは、批判される側はどのような反論をしたのだろうか。かつてQuataertが名前を挙げて批判したのは、中東経済史の大家Isawwiやオスマン経済史で著名なPamukの研究である。たとえば、Quataert(1993)では、Pamukはオスマン朝の手紡糸生産を過小評価していると指

摘し、1900年頃でもオスマン朝領内で使用される全綿糸の少なくとも25%は手紡糸が占めたと具体的な数字を示して批判した (p.40)。また、Issawiの研究については、工場制機械工業生産を称賛しすぎていると批判する (Quataert, 2003, p.5)。

オスマン朝近代史の分野で活躍する Pamuk は、とくに長期間の貿易データや価格データなどを収集・推計し、それを基にオスマン朝経済を分析してきた。Pamuk (1986) では、綿織物を事例として手工業の衰退過程を再構築し、オスマン朝の工場制工場の影響を考察するために、1820～1910年の綿布や綿糸の輸入量、手紡糸および手織物の生産量、工場制綿糸・織物生産量などを表にまとめている。繊維関連産業は、前工業社会では最も重要かつありふれた産業であり、しかも産業革命もこの分野が主導したために、近代という時期を検討する Pamuk の関心の一分野になったのである。

先に述べたようにこの Pamuk の推計を Quataert は過小評価であるとするが、後に Pamuk & Williamson (2011) は、これに反論している。つまり、Quataert は厳密な数値の訂正ができておらず、また外国製品との競争に直面した手織物生産の消滅の規模に関しても厳密ではないと見る。もちろん、数量経済史研究や長期経済統計研究を専門とする研究者からすれば、Quataert が収集したデータは断片的で、しかも数値自体の検証も不十分といえよう。ただし、そうした批判は、彼の主張の真価を毀損するものではないだろう。なお、この論文では、「オランダ病」、すなわち資源輸出に特化することで、製造業が衰退するという考え方を19世紀のオスマン朝に適用し、賃金や価格あるいは交易条件などの数値を分析している⁸⁾。

4 おわりに

本稿では、オスマン朝の手織物研究の動向について検討した。まず Faroqi の研究は、16、17世紀が主たる対象時期であり、アナトリア地方の都市部のみならず農村部においても市場向けの織物生産が盛んであったことを明らかにした。しかも、歴史的に各地で生産の変動があったこともわかった。また、毛織物や綿織物、麻織物産地などに産地の特化がみられ、それをきちんと図示したことも功績である。ただ、環境との関係で地域的な産地の特化が分析されていな

8) Panza (2014) は、Pamuk & Williamson (2011) の研究を発展させたものであり、1850年から1914年間の「オランダ病」モデルから、オスマン朝の2地区 (エジプトとイズミール) を検討する研究である。ここでは、Quataert の複数の研究を引用しているが、手織物産業には工業衰退が生じたとして、再工業化 (re-industrialization) については手工業ではなく近代的な工場制機械工業のみを想定している。つまり、Quataert の主張は広く受け入れられるようになったが、それでも「工業」とはあくまで近代的な工場制機械工業を想定する傾向が根強い。

い点は残念である。もちろん、環境史的な側面からのオスマン経済史の検討は最近のことなので、これは求めすぎであろうか。

Quataertの場合も、19世紀の状況を単なる「衰退」と捉えるのではなく、変化への対応として捉える観点が重要である。それゆえ、「手織物」と一括はできず、産地が異なれば、あるいは織物の種類が異なれば、受ける変化や変化への対応も異なることになる。そして、彼の手織物の衰退論批判は、イランにもかなり当てはまるように思う。ただし、世界システムに早くかつ深く組み込まれたオスマン朝と異なり、イランの場合は史料的な制約があるように思う。実は筆者も同じように、19世紀のイランの脱工業化、工業衰退について論じたことがあり、オスマン朝に比べると史料の量も質も劣ったが、同じような傾向は得られた(吉田, 2002)。

本稿ではイランとの比較まではできなかったが、トルコとイランでは、ヨーロッパとのかかわりも異なれば、国内の産業構造や政治状況も異なる。しかし、以下のような点については参考になると考える。まず、(1)徴税やギルド関係の史料が豊富な中央集権的なオスマン朝であっても、手工業生産者の生活そのものを明らかにできる史料は乏しい。しかし、そうした史料の問題を乗り越えて、両者が主張したように、(2)個々の産業・産地の発展ないし衰退、変化への対応は多様であり、産地により大きな差がみられる。したがって、有名産地の事例を一般化し「脱工業化、工業衰退」と即断することは危険である。そして、(3)各産地が経験した多様な変化や変化への対応は、ローカルおよび国内、国際的な政治・経済の変動や消費市場の動向、民族問題などが左右した。また、(4)生産は自給用だけでなく市場向けにもおこなわれたのであり、産地をローカルやリージョナル、ナショナル、インターナショナルのそれぞれのスケールに置いて把握することと、そうしたスケール間のネットワークに位置づけて考察する必要がある。(5)いわゆる「衰退パラダイム」は近代の手織物のみならず、現代のわたしたちのものの方をも強く規定している。これらの諸点は今を対象とする研究であっても参考になると考えられる。

文 献

- Costantini, V. and Koller, M. eds. (2008): *Living in the Ottoman Ecumenical Community : Essays in Honour of Suraiya Faroqhi*, Brill.
- Faroqhi, S. (1979a): "Notes on the Production of Cotton and Cotton Cloth in XVIth and XVIIth Century Anatolia", *The Journal of European Economic History*, 8-2, pp.405-417.
- Faroqhi, S. (1979b): "Alum Production and Alum Trade in the Ottoman Empire (about 1560-1830)", *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes*, 71, pp.153-175 in Faroqhi, S. (1986), *Peasants, Dervishes and Traders in the Ottoman Empire*.
- Faroqhi, S. (1980): "Textile Production in Rumeli and the Arab Province: Geographical Distribution and Internal Trade (1560-1650)", *Osmanlı Araştırmaları*, 1, pp.61-83 in Faroqhi, S. (1986), *Peasants*,

- Dervishes and Traders in the Ottoman Empire.*
- Faroqhi, S. (1983): "The Peasants of Saideli in the Late Sixteenth Century", *Archivum Ottomanicum*, 8, pp.216–250 in Faroqhi, S. (1986): *Peasants, Dervishes and Traders in the Ottoman Empire.*
- Faroqhi, S. (1984): *Towns and Townsmen of Ottoman Anatolia : Trade, Crafts, and Food Production in an Urban Setting, 1520–1650*, Cambridge University Press.
- Faroqhi, S. (1986): *Peasants, Dervishes and Traders in the Ottoman Empire*, Variorum Reprints.
- Faroqhi, S. (1991): "The Fieldglass and the Magnifying Lens : Studies of Ottoman Crafts and Craftsmen", *Journal of European Economic History*, 20-1, pp.29–57.
- Faroqhi, S. (1999): *Approaching Ottoman History : An Introduction to the Sources*, Cambridge University Press.
- Faroqhi, S. (2006a): "Guildsmen and Handicraft Producers", in S. Faroqhi, ed., *The Cambridge History of Turkey: The Later Ottoman Empire, 1603–1839*, Cambridge University Press, pp.336–355.
- Faroqhi, S. (2006b): "Declines and Revivals in Textile Production", in S. Faroqhi, ed. (2006). *The Cambridge History of Turkey: The Later Ottoman Empire, 1603–1839*, Cambridge University Press, pp.356–375.
- Faroqhi, S. (2013), "Entering and Leaving the Empire's Industrious Core: Bursa and its Textiles" in Faroqhi, S., *Travel and Artisans in the Ottoman Empire : Employment and Mobility in the Early Modern Era*, I. B. Tauris, pp.99–116.
- Foran, J. (1989): "The Making of an External Arena : Iran's Place in the World-System, 1500–1722", *Review*, 12-1, pp.71–119.
- Göçek, F. M. (1987): *East encounters West : France and the Ottoman Empire in the Eighteenth Century*, Oxford University Press.
- İnalcık, H. (1978): "Impact of the *Annales* School on Ottoman Studies and New Findings", *Review, Journal of the Fernand Braudel Center*, 1 - 3 /4, pp.69–96.
- İnalcık, H. and Quataert, D. (1994): *An Economic and Social History of the Ottoman Empire, 1300–1914*, Cambridge University Press.
- İslamoğlu-İnan, H. (1987): "Introduction: 'Oriental Despotism' in World-System Perspective", in H. İslamoğlu-İnan, ed.(1987): *The Ottoman Empire and the World-Economy*, pp.1–24.
- İslamoğlu-İnan, H. ed. (1987): *The Ottoman Empire and the World-Economy*, Cambridge University Press.
- Kasaba, R. (1988): *The Ottoman Empire and the World Economy : The Nineteenth Century*, SUNY.
- Koller, M. (2008): "Introduction: Ottoman Ecumenical Communities – an Approach to Ottoman History", in V. Costantini and M. Koller, eds. (2008), *Living in the Ottoman Ecumenical Community : Essays in Honour of Suraiya Faroqhi*, Brill, pp.1–14.
- Mendels, F. (1969): *Industrialization and Population Pressure in Eighteenth-Century Flanders*, ph. D. dissertation, Univ. of Wisconsin.
- Newman, A. J. (2006): *Safavid Iran: Rebirth of a Persian Empire*, I.B. Tauris.
- Palairot, M. R. (1982): "Woollen Textile Manufacturing in the Balkans, 1850–1911. A Study of Protoindustrial Failure" paper submitted in the A 2 section of the Eighth International Congress of Economic History Budapest.
- Pamuk, Ş. (1986): "The Decline and Resistance of Ottoman Cotton Textiles, 1820–1913", *Explorations in Economic History*, 23, pp. 205–25 in Pamuk, Ş. (1987), *The Ottoman Empire and European*

Capitalism, 1820-1913, Cambridge University Press.

- Pamuk, Ş. (1988): "The Ottoman Empire in Comparative Perspective", *Review*, 11-2, pp.127-149.
- Pamuk, Ş. & Williamson, J. (2011): "Ottoman De-industrialization, 1800-1913: Assessing the Magnitude, Impact, and Response", *The Economic History Review*, 64-1, pp.159-184.
- Panza, L. (2014): "De-industrialization and Re-industrialization in the Middle East: Reflections on the Cotton Industry in Egypt and in the Izmir Region", *The Economic History Review*, 67-1, pp.146-169.
- Quataert, D. (1983): "The Silk Industry of Bursa, 1880-1914" in J. Bacqué-Grammont and P. Dumont, eds., *Contributions à l'histoire économique et sociale de l'Empire ottoman*, Paris: Editions Peeters, pp.481-503 (in Huri İslamoğlu-İnan, ed., *The Ottoman Empire and the World-Economy*, Cambridge University Press, 1987, pp.284-299に再録).
- Quataert, D. (1986): "Machine Breaking and the Changing Carpet Industry of Western Anatolia 1868-1914", *Journal of Social History*, 19-3, pp.473-489.
- Quataert, D. (1988): "Ottoman Handicrafts and Industry in the Age of Imperialism", *Review*, 11-2, pp.169-178.
- Quataert, D. (1991): "Ottoman Women, Households, and Textile Manufacture, 1800-1914", in Albert Hourani, Philip S. Khoury and Mary C. Wilson, eds. (1993), *The Modern Middle East: a Reader*, Tauris (Keddie & Baron eds., *Women in Middle Eastern History*, 1991, pp.161-176の再録).
- Quataert, D. (1993): *Ottoman Manufacturing in the Age of the Industrial Revolution*, Cambridge University Press.
- Quataert, D. (2003): "Ottoman History Writing and Changing Attitudes Towards the Notion of "Decline", *History Compass*, 1-1, pp.1-9.
- Ogilvie, S. C. (1993): "Proto-industrialization in Europe", *Continuity and Change*, 8-2, pp.159-179.
- Streusand, D. E. (2011): *Islamic Gunpowder Empires: Ottomans, Safavids, and Mughals*, Westview Press.
- Yamaguchgi, A. (2003): "Urban-Rural Relations in Early-Century Iran: A Case Study of Settlement Patterns in the Province of Hamadan" in N. Kondo, ed. (2003), *Pesian Documents: Social History of Iran and Turan in the Fifteenth to Nineteenth Centuries*, Routledge Curzon, pp.148-185.
- 五十嵐大介 (2002): 「資料紹介／オスマン朝ダマスカスの商事裁判所：ダマスカス歴史文書館所蔵「ダマスカス商事裁判所台帳 (sijillāt maḥkama tijāriya Dimashq)」の紹介」『日本中東学会年報』、17-1、201-224頁。
- 上羽陽子 (2006): 『インド・ラバリー社会の染織と儀礼：ラクダとともに生きる人びと』、昭和堂。
- 江川ひかり (1998): 「一九世紀中葉バルケシルの都市社会と商工業：アバ産業を中心に」『お茶の水史学』、42号、1-42頁。
- 江川ひかり (1999): 「オスマン帝国史研究動向：19世紀社会経済史を中心として」『中東研究』、454、42-46頁。
- 金谷美和 (2007): 『布がつくる社会関係：インド紋り染め布とムスリム職人の民族誌』、思文閣出版。
- 澤井一彰 (2015): 『オスマン朝の食糧危機と穀物供給：16世紀後半の東地中海世界』、山川出版社。
- 鈴木董編 (2012): 『オスマン帝国史の諸相』、山川出版社。
- 田村うらら (2013): 『トルコ絨毯が織りなす社会生活』、世界思想社。
- テイラー、P. J. (高木彰彦訳) (1991): 『世界システムの政治地理 (上・下)』、大明堂。
- 永田雄三 (1976): 「オスマン帝国社会経済史研究における遺産目録文書の重要性」『東洋学報』、57-3、553-558頁。

- 永田雄三（1997）：「後期オスマン帝国の徴税請負制に関する若干の考察—地方名士の権力基盤としての側面を中心に—」『駿台史学』、100、75-108頁。
- 林佳世子（1991）：「トルコ」羽田正・三浦徹編『イスラム都市研究 [歴史と展望]』、東京大学出版会、163-216頁。
- 藤木健二（2004）：「オスマン朝下の同職組合に関する研究動向と課題：イ・ウンジョンのイスタンブル研究に寄せて（批評と紹介）」『史學（三田史學會）』、73-2・3、147-171頁。
- 藤木健二（2005）：「18世紀イスタンブルの同職組合：家畜利用業種の分析から」『日本中東学会年報』、20-2、221-243頁。
- 松井真子（1999）：「オスマン帝国の内国交易政策とムスターミン商人—ミーリー税を手がかりに—」『日本中東学会年報』、14、197-218頁。
- 三沢伸生（1999）：「オスマン朝社会経済史（前近代）の研究動向」『中東研究』、446、45-47頁。
- 吉田雄介（2002）：「近代イランの工業衰退（De-industrialization）というパラダイムの見直し：イランの機業に向けられたまなざし」『史泉』、95、55-76頁。